

## B型肝炎ウイルスの再活性化

平成 28 年 6 月放送

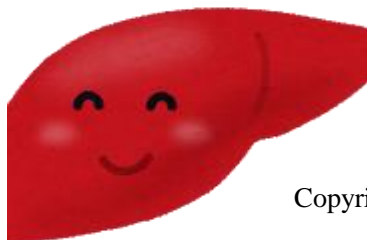
守護 晴彦

B型肝炎ウイルスは血液などの体液を介して感染するウイルスであり、出産時にウイルスに感染している母親から赤ちゃんに感染してしまう場合や、ウイルス保持者との性交渉、十分な消毒をしていない器具を使った医療行為、入れ墨、ピアスの穴開けなどによって感染してしまう場合があります。ワクチンでの感染予防が確立しており、特にウイルス感染が判明している母親からの出産後には赤ちゃんに対して免疫グロブリン製剤の投与とワクチン接種といった対策を行うことによって新たな感染を予防できるようになってきています。

B型肝炎ウイルスに感染すると1割のひとは慢性肝炎という持続性の肝炎を引き起こし、肝硬変や肝細胞癌に至る一方、9割のひとは肝炎をおこさず、ウイルスが体内にいても悪さをしない無症候性キャリアという状態やウイルスが見当たらない既往感染者になります。

しかし体内からはウイルスが完全に排除されておらず、免疫力が低下するような特殊な体の状態になると再びウイルスが増殖する、「再活性化」という現象を起こす場合があることがわかってきました。特に自己免疫性疾患に対して使用する免疫抑制剤や血液などの癌に対する抗がん剤などの治療によって免疫機能が非常に低下して引き起こされる場合があることが注目されています。

自己免疫性疾患のなかでも頻度の多い関節リウマチは近年治療の進歩が目覚ましい病気ですが、従来から使用されているメトトレキサートという薬や最近登場した生物学的製剤という注射の治療によって体内に潜んでいたウイルスが再活性化して肝炎を発症



することが報告されています。また抗がん剤では、血液のがんである悪性リンパ腫に対する一般的な治療であるリツキシマブという薬を使用する場合に特に注意が必要で、ウイルスの再活性化から重症の肝炎である劇症肝炎を引き起こして患者さんが亡くなってしまったという事案が次々に報告されました。それ以外にも B 型肝炎ウイルス再活性化の危険があるとされる薬剤は 50 種類以上にもおよび、これらの治療を行う際には注意が必要です。

ウイルス再活性化による肝炎は重症化しやすく致命的になりえるだけでなく、肝炎の発症によってもととの病気の治療を困難にさせるため、危険のある薬剤を使用する場合には B 型肝炎ウイルスの検査を行い、必要に応じて予防的治療を開始します。また薬剤の投与中はもちろん、治療が終わった後も再活性化の危険があるため、治療を終了してからも 1 年間は再活性化が起こっていないかを定期的に採血検査で確認する必要があります。

ご自分の病気に必要な治療を B 型肝炎ウイルスという伏兵に邪魔されないように気をつけていきましょう。